

平成二十二年 度

第一回 女子美術大学付属中学校入学試験

国語

〔問題用紙〕

(五〇分)

受験番号

氏 名

解答はすべて解答用紙に記入すること。

(試験問題を持ち帰ってはならない)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

三学期になると博士は学級委員長を退任した。^A博士とサンペイ君が無視されているのは変わりなかったけれど、委員長の役がなくなったことで博士の気持ちはぐっと楽になった。別に卒業まで今のままでも、まあ、なんとかやっていけるだろう。そんなふうに思っていたところ、新年最初の学活で、新委員長の小林さんが突然言ったのだ。^B

「中田君と大窪君がのけ者にされているのはよくないと思います。まずそのことをみんなで話し合いたいです」

小林さんは博士と同じ新興住宅地に住んでいる女子だった。ミニバスの中心選手だったし、活発で、正義感が強かった。そういえば二学期中、博士が委員長だった頃、よく発言して助けてくれた。また、普段もなにかと気に掛けてくれるところがあった。

しーんと凍り付いたみたいなきろい。小林さんの発言に誰も反応せず、ただ、誰かが何かを言うのを待っているような感じだった。

沈黙を破ったのは、柿崎先生だった。黒板の脇にある先生用の机の前で急に立ち上がり、「おまえら、それは本当か」と野太い声で言った。「おい、中田、大窪、本当なのか」

本当です、と博士は声が出そうになった。でも、舌がカラカラに乾いて、口が動かなかった。サンペイ君は心ここにあらずで、窓の外を見ていた。^②こんな時にも相変わらずなのだ。

「ま、本人にはこういうのはいくいのものだ。小林、もう少し詳しく話しなさい」

「二学期の間、ずっとだったんです。最初は内山君が――」

その瞬間、クラスの視線が福ちゃんに集まった。福ちゃんは、視線を宙に泳がせて、なんとなく I した様子だった。

「なんだ、内山がどうかしたのか」と柿崎先生。

「そんなことはありません」と声が出た。

サンペイ君だった。すぐく毅然としていて、^③いつものサンペイ君じゃなかった。博士だけが知っている、クールで自

信満々で、ものに動じないサンペイ君だった。

「委員長の誤解です。ぼくと内山君は仲がいいです」

「中田も、大窪も、別に仲間はずれになっっているわけじゃないのだな」

「はい、ぼくたちは仲間はずれにされたりしてません」

先生の発言で、ふっと空気が弛んだ。^④あきらかにほっとした感じだった。クラスのみんなは自分たちも共犯だと分かっている、それがばれるのはやっぱり嫌なのだ。

小林委員長はこわばった顔で、しばらく議事を続けた。でも、すぐにあきらめたみたいのため息をつき、そこから後はいつもの彼女に戻った。

放課後、博士とサンペイ君が校門から出ると、^C福ちゃん^{注2}が後を追ってきた。「ちよつとこつちへ」と道端の自動販売機の脇に引つ張っていつて、口元を震わせながら、「なんで、ナカタがおれをかばうんだべ」と詰問した。

「かばったわけではないのだよ」とサンペイ君が返した。

「かばったべ」

「かばってはいないのだ」

「なんだか押し問答^Aになつてくる。

「昼休み、ナカタがどこにいるかみんな知ってるべ。あんな小さな池に大きな魚なんかいるもんか。馬鹿^{ばか}じゃねえのか」

「馬鹿じゃないのだ。あそこにはヌシがいるのだ」

⑤「おれが先生にチクるなつて言つておいてやらなきや、どうなるか分かつてるべ」

福ちゃんは、やけを起こしたような言い方だった。

「かばつてくれて、ありがとう。でも、ぼくはきみとはあまりかかわりたくないのだ。だから、無視されると逆にありがたいのだ」

「そうか、わかった。ならいい」

福ちゃんは、くると背中を向けた。

「ねえ、いいの、あんなこと言つて」博士はサンペイ君を見た。

「ああ、これでいいのだ」

⑥ 博士にはそうは思えなかった。去っていく福ちゃんの背中を追いかけた。

「ごめん、福ちゃん、サンペイ君はああだから……」自分でもなぜ謝っているのか分からなかったけど、つい博士は謝っていた。

「馬鹿にしてるべ」

福ちゃんは立ち止まって博士を見た。

「ハカセも、ナカタも、おれのこと馬鹿にしてるべ」

「そんなことないよ」

「いや、馬鹿にしてる」

「してない」

ここでも押し問答になってしまった。

「サンペイ君はすごいんだ。福ちゃんが仲良くしてくれたら、みんなサンペイ君のこと、よく分かると思うのに。本当にすごいし、おもしろいんだから。福ちゃんが言っていた、ほら話だって、本当に本当なんだから」

「本当だったら、すごいのか。おれらには関係のない話だべ。あいつも、あいつのおじさんも、勝手に月でも火星でも行けばいいべ」

⑦ 博士には福ちゃんがなんで、そんなにサンペイ君を目の敵かたみにするのか分からなかった。先生だって夢を見ることはいいことだって言うじゃないか。サンペイ君が大きなことを言ったりするのって、そんなに悪いことなんだろうか。

「福ちゃん、おかしいよ。福ちゃんってもつと分け隔へだてないんだと思ってた。でも、今はみんな福ちゃんが怖こわいんだよ。だから、ぼくたちに話しかけられない。福ちゃんはそんなにいいの？」

福ちゃんのはつとした顔で、博士を見た。

「ハカセにそんなこと言われるとなあ……」と小さく呟つぶやいた。「おれ、頭、悪いし、おやじは家を継つげって言うし、たぶん高校出たらそうなるんだべさ。けど、ナカタは勉強すりゃあ、一番になれるやつだ。でも、やらん。それで、一人でス力ちからしてる」

「福ちゃんは、クラスの人気者じゃないか。みんな福ちゃんが好きだし、いるだけでばつと明るくなる。サンペイ君の

こと、気にすることなんてないんだよ」

「そうだから……」

福ちゃんくろちゃんは唇くちびるを嚙かんでいた。博士には分からなかったけど、福ちゃんにとっては大きなことなんだというのが伝わってきた。

サンペイ君はもう帰ってしまったので、博士はサンペイ君の家に向かった。

離れはなの部屋にはサンペイ君はいなかった。たぶん川に行ったのだと思って博士はいつものポイント注3に向かった。はたして、サンペイ君は一人で釣り糸つりいとを外いれていた。

「やあ、ハカセ君」サンペイ君は後ろ向きのまま言った。

「福ちゃんと仲直りした方がいいと思うよ」博士はいきなり核心かくしんに切り込んだ。

「やつはぼくが気に入らないのだよ。瓢箪池ひょうたんのヌシのことだって、やつは信じようとしなからね。こっちはおじさんが釣りかけて、糸を切られるのをこの目で見ているのだ。ヌシはぜったいにいるのだ」

「ぼくはクラスのみんなにサンペイ君のこと、もつと知ってほしいんだよ。こんなにすごいし、おもしろいのに、みんな全然知らないんだ」

「そんなことはいいのだよ、ハカセ君。ぼくたちは遠くにいくのだから、小さな教室にかかわることはないのだ」

「でも、みんなと仲良くやれた方が、楽しいじゃないか。サンペイ君はおかしい。なんか逃げてるみたいだ」
言ってしまった後で、博士ははつとして口に手を当てた。

サンペイ君の肩かたが震えていた。水面うみの浮うきにアタリ注4が来ているのに、竿さおを動かそうともしない。

博士は話しかけられずに、じつと背中を見ていた。

しばらくしてサンペイ君が大きく息を吸い込んだ。

背中を向けたまま、^⑧「ハカセ君、帰かえってくれたまえよ」注5と威圧いあつ的に言った。

博士はそのままⅡと家路についた。

博士は一人きりだった。

相変あひわらずクラスのみんなとは話せなかったし、サンペイ君も博士と視線が合うのを避けていた。だから、学校では

一人きり。以前にもまして、たくさんの本を読み、いろいろ考えたり、煮詰まったり。

ぼくがいるべき場所はここじゃない。そんな感覚がよみがえってきて、お腹の中をⅢと巡っていた。

それでも、なんとか耐えられた。一人でいることに耐えることって、ひよつとするとサンペイ君が博士に教えてくれたちよつとした技術かもしれない。博士は家の近くの川で釣りをすることを覚え、自宅の水槽でタナゴも飼いはじめた。友達がいなくても、本と釣り竿があればそれなりに満ち足りていられたのだ。

釣りつていい。辛いことを忘れられる。

どうして釣りを始めたのか聞かれたら、たぶん博士はそう答えただろう。

冬だから寒くて、博士は鼻水をたつぷりたらしながらも、川に出るのはやめなかった。

博士はこんな日が、ずっと続くのを覚悟していた。中学ではさすがにそんなことないだろうけど、小学校の間はこのままなのだ。覚悟すれば、しつかりとした気分であいられた。

三月になったばかりの昼休み、博士は例によって一人で本を読んでいた。

昼休みが半分過ぎたことを告げるチャイムが鳴った時、廊下をあわただしく走る足音が聞こえてきた。

「ハカセ君、急いで来てくれないか」

息を弾ませた声に振り向くと、サンペイ君が教室の入口のところに立っていた。

突然のことで驚いたのが一番だったけれど、同時にすぐうれしくて、博士は「いいよ」と立ち上がった。

「とにかく急いで来るのだ。ハカセ君は是非見に来るべきなのだ」

ちよつと高飛車で、なのに憎めない、言葉を交わさなくなる前とまったく同じサンペイ君だった。

後をついていく時、サンペイ君の服にあちこち泥がついていることに気づいた。

サンペイ君は校舎を出て、まっすぐに瓢箪池に向かった。池のほとりには釣り竿が投げ出されていて、大きなタモ網が水の中に半分浸してあった。泥にまみれた取っ手をむんずと掴み、持ち上げると、水が飛び散るのも構わずに大きく振って博士の前に差し出した。

博士の目は網の中に吸い寄せられた。黒っぽい銀色の魚が、木漏れ日を反射しながら力強く身をくねらせていた。「ヌシなのだ。水がぬるんで、やっと釣れたのだ」

いつものように淡々と言おうとしているけど、どこことなく声がうわずつていた。^⑩

「すごい……」博士はひとこと言つて黙り込んだ。

「本当にすごいと思つた。サンペイ君はずつと「ヌシ」のことを話していたけれど、ここまで大きく立派なものだなんてソウゾウしていなかった。」

ゲンゴロウブナ。たしか、そうだ。顔の後ろから背びれにかけてこんもりと盛り上がったたくましい形をしていて、なによりも大きかった。たぶん、五十センチ近くはあるんじゃないだろうか。サンペイ君や博士の体の幅よりもずっと大きい。

サンペイ君は嘘をつかない。^⑪博士はなんだかじーンとしてしまつて、その場に立ちつくした。遠くで午後の授業が始まる五分前のチャイムが鳴つていたけれど、そのチャイムの意味さえ気がつかなかつたほどだ。

「さあ、ハカセ君、そろそろいくのだ」

サンペイ君はタモ網を水に戻して、服に付いた乾いた泥を払つた。

「ねえ、サンペイ君、この魚どうするの」博士は熱のこもつた口調で言つた。

「そうだな。放課後まではこうしておくとして、とりあえず飼つてみるかもしれないな。でも、飼いきれないなら魚拓を取るのだ。こいつは魚拓を取るのに値するのだよ。おじさんが帰つてきたら見せなければならぬのだ」

「みんなには見せないの」

「なぜ、そんな必要があるのだい。ぼくはヌシを釣つただけで満足なのだ」

博士は小さくため息をついた。サンペイ君はいつもそうだ。

近くに銀色のバケツが転がっていた。博士はそれで池から水をくみ取り、タモ網を上げて中にそいつを落とした。バケツはいかにも小さかつたけれど、体を少し丸めるようにしてなんとか収まつた。

「なにをするのだね、ハカセ君」

サンペイ君が少し慌てた口調で言つた。

「いいから、いいから」

^⑫博士はバケツを持つて走り始めた。水がちやぶちやぶ撥ねて指に触れ、冷たいのになぜか気持ちよかつた。サンペイ君はほら吹きじゃない。本当にすごいんだ。

心の中でつぶやきながら、IV 走った。こぼれた水は指だけじゃなく、シャツやズボンまで濡らしたけれど、それも気にならなかった。

教室の扉をガタンと開けたのは、午後の授業が始まった瞬間だった。

「大窪、どうした。遅刻だぞ。それにどうした、中田まで——」

柿崎先生の声を無視して、博士は大声を出した。

「ヌシやでー、ヌシが釣れたでー、サンペイ君が釣ったんやでー」

みんながぼかんと口を開けてこつちを見ている。自分が関西弁で話しているのに気づいたけれど、それはどうでもよかった。

「ほら、みんな、見いや。でかいでえ。ほんま、でかいでえ」

「ハカセ君、やめるのだ。ぼくはこんなのは好きじゃないのだ」

そう言いながらも、サンペイ君は本気で止めようとはしなかった。どつちにしたって博士はサンペイ君の願いを聞き入れるつもりなんてなかった。

博士は教室を小走りに移動して教壇きょうだんの前に立った。

「大窪、どういうつもりだ」

先生の言葉をまたも無視し、博士はバケツの口を傾かたむけてみんなの方に向けた。それだけでは見えないと思い、バケツを床に置いて中からゲンゴロウブナを掴みあげた。手で持つというより、体で抱え込んだ。

どよめきが、漏れた。

「すげえじゃん」と誰かが言い、次々に賞賛しょうさんの声が上がった。魚が嫌いな女子がいて、「いやだー、やめてよ」と大声で抗議した。

でも、博士は無視した。

まっすぐ歩き、福ちゃんの前に立った。

目が合うと、福ちゃんはその場で腰こしを浮かせて半分だけ立ち上がった。

「な、サンペイ君はほら吹きとちゃうで」

返事はなく、ただ福ちゃんはヌシを見つめていた。

ふいにヌシが腕うでの中で暴れ、のけぞった博士の腕から躍り出た。福ちゃんが慌てて両腕をさしのべたけれど、それは反対の方向にジャンプし宙を舞った。

振り向くと、サンペイ君の腕の中で、激しく身をよじっていた。サンペイ君はいつのまにか博士の背後に立っていて、ヌシをキャッチしたのだった。

博士ははつと息をのんだ。サンペイ君は口を一文字に結んで福ちゃんを見ている。

そして、やおら教室全体を見渡し、無言のまま魚体を高々と、まるでバスプロの大会で優勝したトロフィのように掲げた。

誰も言葉を発しなかった。先生さえ、息を詰めて見つめていた。クラスの真ん中にただヌシとサンペイ君と福ちゃん

がいて、コトリとも音はせず、しんしんと時間が過ぎた。

またも元気に体をくねらせたヌシから、飛沫しぶきが散った。
窓からの光がハンシヤして、教室全体が一瞬、おひさまの金色にほーつと輝いた。

——「今ここにいるぼくらは」 川端裕人 より——

注 1 毅然として . . . 意思が固く、ものに動じない様子。

2 詰問 . . . 厳しく問いつめること。

3 ポイント . . . 魚がよく釣れる場所。

4 アタリが来ている . . . 魚がえさに食いつき、糸を引いている。

5 威圧的 . . . 力で相手をおさえつける様子。

6 高飛車 . . . 相手をおさえつけて何も言わせない様子。

7 魚拓 . . . 魚に墨すみをぬって、和紙に形をとったもの。

問一 ― 線 A 「博士」・B 「サンペイ君」・C 「福ちゃん」の名字をそれぞれ答えなさい。

問二 ― 線①「それ」とは、どのようなことですか。分かりやすく説明しなさい。

問三 ― 線②「こんな時」とは、どんな時ですか。分かりやすく説明しなさい。

問四 ― 線③「いつものサンペイ君じゃなかった」とありますが、クラスの中での「いつものサンペイ君」は、どのような様子なのか。分かりやすく答えなさい。

問五 ― 線④「あきらかにほっとした感じだった」とありますが、なぜ「ほっとした」のですか。分かりやすく説明しなさい。

問六 ― 線⑤「おれが先生にチクるなって言っておいてやらなきや、どうなるか分かってるべ」とありますが、どのようなことを先生に「チクる(告げ口する)な」と言っていたのですか。分かりやすく答えなさい。

問七 ― 線⑥「博士にはそうは思えなかった」とありますが、「そう」の内容を分かりやすく説明しなさい。

問八 ― 線⑦「博士には福ちゃんがなんで、そんなにサンペイ君を目の敵にするのか分からなかった」とありますが、福ちゃんがサンペイ君を「目の敵」にする理由が分かるところを探し出し、はじめと終わりを五字ずつぬき出しなさい。(句読点などをふくむ)

問九——線⑧「ハカセ君、帰ってくれたまえよ」とありますが、なぜサンペイ君はそう言ったのですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 昼休みに学校をぬけ出して自分を探しにきた博士を気づかって、早く学校に帰ったほうがいいと思ったから。
イ みんなと仲良くしたほうがいいと分かっているが、そのことから逃げている自分を見ぬかれてしまったから。
ウ 親友だと思っていた博士にも、みんなと仲良くしたくないという自分の気持ちが分かってもらえなかったから。

エ 自分のことをほら吹きだという福ちゃんと仲直りしたほうがいいとすすめる博士の気持ちが分らなかったから。

オ だれにも知られず、ひとりで池のヌシを釣り上げたいと思っていたので、博士にもじまされなくなかったから。

問十——線⑨「同時にすごくうれしくて」とありますが、それはなぜですか。分かりやすく答えなさい。

問十一——線⑩「どことなく声がうわずっていた」とありますが、なぜ「声がうわずっていた」のですか。分かりやすく答えなさい。

問十二——線⑪「博士はなんだかじーンとしてしまつて、その場に立ちつくした」とありますが、それはなぜですか。分かりやすく答えなさい。

問十三——線⑫「博士はバケツを持って走り始めた」とありますが、博士はどうするつもりだったのですか。分かりやすく説明しなさい。

問十四——線⑬「教室全体を見渡し、無言のままで魚体を高々と、まるでバスプロの大会で優勝したトロフィのように掲げた」とありますが、この時のサンペイ君の気持ちを答えなさい。

問十五 文中の□ I～IVにあてはまる言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア ぐるぐる イ そわそわ ウ ぐんぐん エ とぼとぼ

問十六 文中の——線ア・エの漢字の読みをひらがなで書き、イ・ウ・オのカタカナを漢字に直しなさい。

二
例に従って、二字熟語になるように、□に適切な漢字一字を入れなさい。

例
体 ↓ 育 → 児
教 → 育 ↓ 成

①
宿 ↓
話 → □ → 材
 ↓
 名

②
決 ↓
得 → □ → 見
 ↓
 味

③
回 ↓
反 → □ → 習
 ↓
 活

④
人 ↓
実 → □ → 利
 ↓
 力